The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	松岡馨と朝鮮語 ： 人物史と学習書を通して
Author(s)	植田, 晃次
Citation	人文学林. 2025, 2, p. 23-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100777
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

松岡馨と朝鮮語

―人物史と学習書を通して―[1)]

植　田　晃　次

마쓰오카 가오루(松岡馨)와 한국어
―인물사와 학습서를 통하여―

우에다 고오지

논문초록 : 마쓰오카 가오루(松岡馨) 는 “조선어학독안내 전(朝鮮語學獨案内 全)” (1894년), “조선어독수 전(朝鮮語獨脩 全)” (1901년) 등의 저자로서 알려져 있다. 선행연구에서는 마쓰오카의 경력이나 인물사에 대하여 ‘저자의 경력은 명확하지 않다’, ‘저자인 마쓰오카의 출신, 배경에 대해서는 알려진 바가 없다’ 는 언급 외에는 거의 밝혀진 바가 없다. 그럼에도 불구하고 ‘한국어 전문가였다’ 는 추측이나 ‘한국어에 조예가 깊었다’ 는 평가까지 받기도 하였다. 그 결과 그가 남긴 한국어 학습서도 일면적인 평가만을 받아 왔다.

본 논문에서는 인물사주의(人物史主義)와 원물주의(原物主義)에 의거하여 이제까지 알려지지 않았던 그의 인물사(人物史)와 그가 남긴 학습서의 서지에 대하여 밝힌 다음, 마쓰오카와 한국어의 관계를 고찰하였다.

キーワード：松岡馨，朝鮮語学独案内，朝鮮語独脩

1. はじめに

松岡馨（まつおか　かおる[2)]）は，『朝鮮語学独案内　全』・『朝鮮語独脩　全』[3)]（以下，『案内』・

1）本論文は第6回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（2019年8月21日、於延辺大学）での研究発表「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た松岡馨と朝鮮語―人物史と著書を通して―」に基づき，同シンポジウム論文集に投稿した論文原稿が基になっている。当該論文については，投稿が採用され出版準備中であるとの通知を主催者側から受けた（2020年9月16日付メール。科研費18K00782の実績報告書（2020～2022年度）・研究成果報告書参照，https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18K00782/，2024年11月23日最終接続）。しかし，2024年2月29日に，当該論文集（ISBN:9791169191364）が2023年7月26日付で刊行されていることが判明したため照会したところ，出版直前にあった「出版担当部門」の「審査が以前より厳しくな」ったため不掲載となったという回答を主催者側から受けた（2024年8月28日付メール）。このような経緯を経て，その未発表原稿にその後の研究成果を加えて大幅に加筆・修正し改稿したものが本論文である。

2）現行表記法とは異なるが，著者名の朝鮮文字表記（**마두어가 가어루**）が『朝鮮語独脩　全』の表紙にある。当時は同書（163, 164頁）で村田が**촌뎐**とされているように，日本語の固有名詞には朝鮮漢字音が通常用いられていたが，ここでは日本語音を表記している。また，逆に日本語では，朝鮮語の固有名詞では仁川にインチョンのように朝鮮語音でフリガナが振られていることが指摘されている（SUN Yuna2009: 223–224）。

3）1冊中に，独脩・独修・独習が混在するが，本論文では表紙の表記を採る。

『独脩』）の著者として知られる。先行研究には，書誌学からの桜井（1979），学習書の概略を紹介し，主に言語史から検討した李康民（2010・2018）等がある。また，影印に付した解題の李康民（2019a・2019b）がある。この他，1945年以前の朝鮮語学習書を概観・考察したSUN Yuna（2009）・成**玧姸**（2014）・李康民（2015），仮名音註を考察した陳南澤（2013），単語の部門配列と日本語の特色を検討した斎藤（2014）等がある。しかし，「著者の経歴については詳らかにしない」，「著者松岡の出身背景については知られたところがない（後略）」[4]というように松岡の人物史についてはほとんど明らかにされていない。沼津兵学校研究からの樋口（2006・2007）等も朝鮮語関連の言及は速成朝鮮語学校の設立や学習書名の紹介程度にとどまる。それにも拘らず，「朝鮮語の専門家であった」という「推測」や，「朝鮮語に造詣が深く，辞書も刊行している。」という評価まである[5]。また，5章で述べるように，彼の学習書についても一面的な見方がされてきた[6]。

本論文では，人物史主義と原物主義[7]に基づき，松岡の人物史と学習書の書誌を解明した上で，彼と朝鮮語との関わりを明らかにする。

2. 松岡馨の人物史[8]

松岡馨（旧名捨三郎）は1853（嘉永6）年4月28日生まれ，のちに榎本武揚政権下の江差奉行を務める幕臣・松岡四郎次郎（譲）と母・ふさの長男である[9]。静岡県士族で，長谷部甚弥に

4）桜井（1979: 504）・李康民（2015: 85）。以下，朝鮮語文献は拙訳で示す。

5）早川（2006: 297）・樋口（2006: 4）。ただし，管見の限りでは，朝鮮語の辞書は見られない。後述の『英和通商字典』との混同の可能性がある。

6）例えば，SUN Yuna（2009: 223, 242）では，『朝鮮語学独案内』と『朝鮮語独脩』の出版目的・対象をそれぞれ「①日清戦争への活用・貿易　②軍人・商人」，「①日常生活，商業・貿易，交流，戦争への活用　②日本人」としており，明示的な一面が強調されているといえよう。

7）これらの方法論は植田（2012: 204）参照。本論文の執筆者が原物主義を採る理由は，時間・費用・体力を要することを理由として，研究の主対象資料そのものを影印等で済ますことは，「考古学者が土器の写真やレプリカのみで研究することを是とするようなもの」（植田2021: 3）と考えるためである。これには，資料の改変（3．で述べる），杜撰な影印や解題，研究倫理上の問題点（植田2021: 3）にも鑑みるためである。また，デジタル化資料にのみ頼らないことによる新たな知見について注43で述べる。本論文ではこれに加え，公文書精神・公文書方法（仮称）という方法論も用いる。これは，「とりわけ官の世界で活動した人物、また、ある人物が官の世界で活動した時期についての研究で、相対的に信頼度が高い公文書を用いることにより、資料を発掘する方法。（中略）近年は公文書のデジタル化が進み、資料の発掘に寄与しているが、検索のみではたどり着けない文書も少なくなく、実際にはあたりをつけて丁寧に文書を確認・検討しなければ通りいっぺんなものとなってしまう。」というものである（植田2019: 1）。この方法論の実践として，植田（2011・2017・2019）等がある。このほか，公文書を用いた論考として田阪（2010a・2010b）等もある。なお，本論文で利用した公文書については，東京都公文書館での閲覧時（2019年7月2日），「個人情報に関する文書閲覧申込書」の提出にあたって，カウンター職員の方に，（掲載・放映でなく）単なる引用の場合には，特に許可の申請等は必要ないことを確認した。その上で，個人情報保護の観点から不適切であると判断した情報については引用を控えた。

8）本章の記述は，原則として松岡の「履歴書」（東京都公文書　収録先簿冊の資料ID：000124529の一部。以下，東公ID:XXXXXXXXXと略）とその翻刻・解題の樋口（2006: 4, 42–45）による。その他は特に注記する。

9）樋口（1997: 40, 56・2006: 4・2007: 604）・無署名（1998: 3）。旧名は石橋（1916a: 23・1916b: 20）でも確認できる。父・譲は日光奉行支配吟味役等を務めた旧幕臣で，新政府に恭順，謹慎・出獄後には北海道開拓使出仕後，三井物産函館支店支配人を務め，茅沼炭鉱の経営に携わるも失敗して没した（西澤2001: 171・木山2009: 199）。松岡馨の写真は見出していないが，父・譲と思われる写真は函館市立中央図書館ウェブサイト＞郷土のコーナー＞デジタル図書館＞写真＞松岡謙（資料番号：ph001093）で見られる（https://archives.c.fun.ac.jp/photos/ph001093/0001　2024年9月3日最終接続）。ここでは名前が「謙」となっているが，「三井物産函館支店支配人」とあることから，松岡譲とみなした。

漢学（1861.4.～1863.11.），古屋佐久左衛門塾で英学（1862.2.～1863.5.），福地源一郎にも英学（1863.5.～同年9.），大鳥圭介に仏語学（1868.2～同年6.）を学ぶ。1868（慶応4）年5月，徳川家の駿府への移封が決定され，旧幕臣の静岡への移住が行われる[10]。同年，榎本軍に加わり脱走する父に代わり家督を継ぐ（7.25）[11]。1869（明治2）年，沼津小学校教授方介となる（3.18）。1870（明治3）年，沼津兵学校（1869.1開校[12]）の第6期資業生となり（9.28[13]），1871（明治4）年，兵学校附属病院生徒（5.3）を経て「医学為修業東京在勤」（9.16）となる[14]。1872（明治5）年，病院生徒を差免される（4.18）。同年，沼津兵学校は陸軍兵学寮に合併される（写真1・2）。その後，ダビッド＝ヘーヤに英語（1873.2.～1874.5.）を，上野清に数学（1874.1.～1875.6.）を学ぶ。

写真1　沼津兵学校の門柱[15]

写真2「沼津兵学校址」碑と「沼津兵学校記念碑」[16]

1876（明治9）年，熊谷県の暢発学校十二等教員（3.4）となり教師に転身するが，4ケ月後には，同校教員一同が職務差免される（7.5）[17]。同校は近代的な学校制度確立のための指導者・

10）樋口（1990: 307）・樋口（2007: 年表9）・田村（1998）

11）以下，月日を（　）内に略記する。

12）樋口（1990: 307）

13）米山（1935: 108）では「九月廿四日及第」。

14）樋口（2006: 4）・石橋（1916b: 20–21）

15）沼津市明治史料館敷地内に移設されている。門柱の間の銘板には以下の説明がある。「沼津兵学校　門柱／この門柱は、沼津兵学校で校門として使用されたと伝えられています。／御影石製で高さ約270㎝、柱幅36.5㎝ほどの大きさがあります。／兵学校が兵部省に移管されたのち、沼津城とともに民間に払下げられました。／東京都目黒区　森田達氏　寄贈」（2019年9月6日，本論文の執筆者撮影）

16）城岡神社境内に移設されている。（2019年9月6日，本論文の執筆者撮影）沼津市ウェブサイトでは，「現在城岡神社境内に明治27年（1894年）9月、徳川家旧臣によって建てられた沼津兵学校の碑と、昭和15年（1940年）、沼津兵学校創立70周年を記念し、当時沼津郵便局横に建てられたこの碑が、その後移設され建てられている。」と説明されている。ホーム＞市政情報＞沼津の文化財＞東海道（沼津宿）編＞城岡神社（沼津兵学校跡）https://www.city.numazu.shizuoka.jp/shisei/profile/bunkazai/toukai/sirooka.htm（2024年9月4日最終接続）。両碑の間にある「沼津城、現在市街と対比図」によれば，沼津兵学校校舎は碑の位置より南西に示されている。沼津市明治史料館の配布資料「沼津兵学校」によれば，同記念碑は明治27年に兵学校と付属小学校の卒業生が建立したものを碑面の剥離がひどいため城岡神社改築に際し複製したものである。この配布資料は，以下でも公開されている。「だいぎかん（代戯館）」https://daigikan.daa.jp/hegakoukinehibun.pdf（2024年11月5日最終接続）

17）同校は，同年9月，群馬県師範学校と改称し高崎に移った。群馬県文書館での調査（2019年9月13～15日）の限りでは松岡に関する公文書は見出せなかった。

実践者として熊谷県が沼津兵学校出身者を集中的に採用する拠点のひとつであった[18]。

この後，陸軍省（1877.4.22～1878.3.11）と工部省（1878.3.12～1881.3.4）に勤める[19]。

1881（明治14）年には，商法講習所教師として採用され転職する（3.15）。同講習所の廃校・東京府商法講習所の設置に伴い，同年，東京府商法講習所一等助教諭となる（9.14）。1884（明治17）年，同所が農商務省所轄の東京商業学校となり，同校教員心得（3.27），助教（8.28）となる。1885（明治18）年，文部省所轄となった同校助教諭（6.4）となる[20]。1887（明治20）年，同校の高等商業学校への改称（10.5）後，1890（明治23）年には同校助教授（10.15）[21]となり，1892（明治25）年，「依願免本官並兼官」（8.2）となる。東京商業学校（尋常科）では1886（明治19）年に数学，高等商業学校（本科）では1887～1890（明治20～23）年に商業算術を担当していた（1889年を除く）[22]。

官職を辞して後，松岡は私立学校を設立する。1892（明治25）年，速成女学校を設置（9.19），校長・教務を兼務する。しかし，半年足らずで廃校してしまう（3.4）[23]。1895（明治28）年には，私立速成朝鮮語学校設置を願い出て（4.4），設置許可を受ける（5.1）[24]。ところが，翌1896（明治29）年には「維持之見込相立不申候ニ付」という理由で廃校届を出す（3.9）[25]。このころ東京では，韓清語学校・東洋語学校・外国語学校・慶應義塾朝鮮語学校といった朝鮮語を（も）教える学校が開設されている[26]。

後述のように，速成朝鮮語学校設置の直前に発行した『朝鮮語学独案内　全』は5版を，それを使い回しした『朝鮮語独脩　全』は11版を重ねる。

以後の足取りは不明であるが，「明治三十年代中期には零落していたが、「何処となく凡人とは違ふ様にて哲学者風」だったという。（一九七三年十二月二八日付小平敦氏宛八木孝始氏書翰）。」という言及がある[27]。1914（大正3）年に没したという[28]。

18）樋口（2012: 155-157）

19）陸軍省第五局第二課会計書記心得，工部省工作局大学校書房掛等を務めた。

20）庶務課兼勤（1886.2.9）

21）1890・1891年には助教諭数学科図書掛を兼ねる（『東京高等商業学校一覧　明治廿三、廿四年』D）。1891年には，高等商業学校書記を兼任（8.16）。

22）一橋大学学園史刊行委員会（1991: 1-2）。なお，1889年には松岡の名はない。また，1888年のみ附属商工徒弟講習所所属とされる。

23）東公ID：000120826にも，同校は「現存セス」とする公文書（1899.10.20付）がある。なお，設置に関する公文書は確認できなかった。同校は神楽坂にほど近い牛込区牛込仲町34番地（わら店上）を住所として，「女子に有用なる普通学」を教えるべく満15～35歳のほぼ読み書きができる者を募集した時点までは確認できる（「女生徒募集」『読売新聞』1892.9.14付朝刊（4）D）。

24）東公ID：000124529，その一部の翻刻の東京都立教育研究所（1973: 852-853）

25）東公ID：000124614。前年12月初旬から廃校の意向があったともある。

26）植田（2007: 21-22）［執筆は山田寛人］

27）樋口（2006: 4）。樋口（2007: 253）に「松岡譲・馨の父子関係については同家戸籍謄本（小平敦氏提供）（中略）をそれぞれ参考にした。」とあり，小平氏は松岡の親族と思われる。

28）樋口（2007: 604）。死去日が不明のため，享年は60ないし61となる。なお，樋口（2006: 4）では1917年没とあるが，履歴書の生年と「六十二歳で没したらしい」という記述に齟齬があるため，本論文では樋口（2007）に従う。

3. 松岡馨の著書

(1)『朝鮮語学独案内　全』[29]

私立速成朝鮮語学校設置願出に約3ヶ月先立つ1894（明治27）年12月20日に青山清吉（発行者）・吉川半七（発売者）から発行され[30]，2版（1895.3.12発行），4版（1896.10.14発行），5版（1900.2.16発行）が確認された[31]。4・5版奥付によれば，3版は1895（明治28）年5月7日発行とある。SUN Yuna（2009: 223）では，松岡と「序を寄せた田口卯吉との関係については不詳」とされているが，2人は沼津兵学校の第6期資業生である。鼎軒・田口卯吉（鉉）は経済界・政界・ジャーナリズムで活動した人物であり，本書刊行直前には府会議員から衆議院議員に当選している[32]。

刊行のタイミング，速成朝鮮語学校の「学舎設置願」に「教科用書ハ追テ編纂致候迄教師口授講義シテ之ヲ生徒ニ筆記セシム但シ松岡馨著朝鮮語学独案内ヲ参考ニ用フ」[33]とあることから同校の（副）教材とすることを念頭に刊行された可能性がある。そして，「日清事件以来世人競ふて朝鮮の風物に眼を注ぐに至り今又革新の機に際せり苟も軍人軍属貿易商の如き渡韓者ハ言ふを俟ず教育家に至る迄凡東洋の時事に関する者ハ必読せざるべからざる好著なり」という広告[34]のように，実質上は対象の広い実用書＝商業出版物としての性格も備えて刊行・重版されたと見られる。日本語にはおよそルビが振られているが，朝鮮人の日本語学習への流用という意図より，識字能力の低い日本人の購入をも狙う販売戦略上の工夫と見られよう。2版・5版では頁番号の（四二）の四が右に90°転倒している[35]。

なお，本書は『日韓会話』（参謀本部）と例文に共通性が見られることから，その関連性や同書を基に編纂されたこと，同書が本書に影響したことが指摘されている[36]。

29）李康民（2019a）が付された影印は，以下の点からNDLのデジタルコレクションの資料を改変して影印したものであると思われる。(1) 標題紙の「明治廿七年」の「年」の左の汚れが同一。(2) 題言2行目の及，3行目の而，4行目の究ほかの箇所の不自然な汚れが，NDLの資料の「東京図書館蔵」という蔵書印の一部と一致する。(3) 奥付の発行日の「二十四」（手書きとみられる）の字形，それを貼り付けたような周囲の枠が同一。(4) 各府県発売所の背景の黒ずみの有無の具合が同一。さらに，以下の点から，原資料を恣意的に改変したものである可能性が高い。(1) 標題紙右上の請求記号票が影印では消去され，貼り付けがないかのように補筆されている。(2) 上述のように題言の蔵書印のみならず，1頁目右上の原本の「坐忘」と読める印影まで消去されている。(3) 奥付の売捌人・関西大売捌所やその住所・名前の周囲が切り取られたように見える。(4) 各府県発売所の上部が切り取られたように見える。原資料の改変に関する断り書きはなく，この影印を見る者には改変されていることがわからない点で分析の対象とする資料としての信用を欠く。

30）2・4版は青山堂支店，5版は青山堂書店発行。

31）初版は一橋大・下関市立中央図書館・東経大D・NDL D，2版は阪大・東大，4版は京大，5版は大阪・秋田の府県立図書館に所蔵されている。なお，所蔵にDと示したデジタル化資料以外は原物を確認した。

32）田口（2000: 39, 322–323）。このような経歴の人物による題言は，後述のような商業出版物である本書の権威付けに一役買っていた可能性がある。

33）東公ID：000124529

34）『読売新聞』1894.12.26付朝刊（1）D 。商業算術担当であったにも拘わらず広告に挙げられた「前高等商業学校助教授」という肩書もまた，田口の題言と同様に本書の権威付けのひとつであろう。

35）初版では転倒はなく，4版は確認漏れのため不詳。

36）SUN Yuna（2009: 201），陳南澤（2014: 49–50, 56・2015: 43）

国文学研究資料館蔵『朝鮮之諺文』は，OPACにあるように『朝鮮語学独案内』と『日韓英三国対話』（赤峰瀬一郎，岡島宝文舘，1892年）を「抄写」したものである[37]。

(2)『朝鮮語独脩 全』[38]

1901（明治34）年[39]11月22日に岡崎屋書店から初版が発行され，同発行所の6版（1904.11.25発行），11版（1910.10.10発行）が確認された[40]。6版・11版奥付に2版以外の発行日がある[41]。確認し得た限りでは，初版には3冊とも標題紙があるが，11版には3冊とも標題紙がない。6版は改装されているため，標題紙・緒言があったのかは不明である。

（1）と同一の頁番号の転倒等から，同じ紙型による作り本と推測される[42]。初版「緒言」で「故ニ名ヅケテ朝鮮語学独案内ト称セリ」と書名が修正されていないこと[43]や，初版「緒言」の「本書ノ編纂ノ意ハ第一、出征ノ軍人ニ便シ第二、貿易ノ商人ヲ利スルニアリ故ニ用語ハ勉メテ平易（後略）」を11版では「本書ハ勉メテ平易」と修正したにも拘わらず，他の箇所の「単語ハ成ルベク軍人又ハ商人実用ノ語音ヲ撰輯シ（後略）」等の文言はそのままであること，上述の頁番号の転倒，さらに印刷の偏りや傾き等きわめて杜撰な作りである。岡崎屋書店は外国語学習書の他に「土井晩翠の本や（中略）相撲図解の本など」[44]の実用書も発行する出版社である。日清戦争以降の社会的背景のなか，独学で朝鮮語が身につくかのような幻想を抱かせる（1）と同様に，独脩という看板を掛け，軍人・商人用という文言を削除してコンセプトを修正しながら「二匹目のドジョウ」を狙ったものが，実用書＝商業出版物として「当たった」ともいえよう[45]。実用書という位置づけは朝鮮語に限らず，上述した出版社の性格とともに，「実用」とは直結しにくいエスペラント（語）についても，当時の社会情勢と関連した意義づけがされてい

37）高乗勲文庫（資料番号：0000135104）。『朝鮮語学独案内　全』（第2版，大阪大学蔵書）と『日韓英三国対話』（個人蔵）の原物とを突合した結果，1丁表から3丁裏途中までが前者の1頁6行目から13頁7行目まで，続きから7丁裏までが後者の第1部9頁1行目から16頁1行目とそのあとの要約，「五十音」（朝鮮文字で書いたもの。**와 위 우 [오쉬] [오ㅟ]** の4・5字目は括弧内を組み合わせた誤記）が書かれている。最後には，「明治卌八年八月□写了」と書かれている。ところどころ省いたり，まとめたり，英語をフリガナのみ写したりしている。この資料は，「言葉に大変関心が高くて、文法の教科書なども編んでい」たという高乗の関心（落合2003: 115–116）から写されたものではないかと考えられる。

38）李康民（2019b）が付された影印もまた，李康民（2019a）が付された影印と同様にNDL のデジタルコレクションの資料を恣意的に改変したものである可能性が高い。たとえば，解題183頁の表紙右上にはNDL蔵と同一の請求記号票等が見られるにも拘わらず，影印本体では消去され，貼り付けがないかのように加工されている。

39）原物はいずれも「三十五年」の五の左に四と押印され，6版・11版奥付と合わせても1901（明治34）年が正しいと判断した。なお，NDL蔵Dの四は押印ではなく手書きで修正したように見える。

40）初版は成田山仏教図書館・東大・NDL D，6版は下関市立長府図書館，11版は九大・鳥取大・滋県大に所蔵されている。なお，所蔵にDと示したデジタル化資料以外は原物を確認した。

41）1903（明治36）.12.31（3版），1904（明治37）.2.15（4版），1904（明治37）.3.25（5版），1904（明治37）.11.25（6版），1905（明治38）.6.20（7版），1906（明治39）.1.5（8版），1907（明治40）.4.3（9版），1909（明治42）.5.20（10版）

42）作り本については，植田（2014）を参照。すべての初版・6版・11版で四の転倒がみられる。

43）斎藤（2014: 40–41）・李康民（2019b: 183）でもこの点を指摘している。しかし，本論文ではデジタル化資料のみに頼らず11版を見ることによって，少なくとも11版では朝鮮語独修に修正されていることや，後述の緒言の修正が明らかになった。

44）浅香（2013: 115）。『新編独逸語独脩』（山口造酒，1921.6.20増訂31版）巻末の「岡崎屋発行略目」では，英・仏・独・露・伊・西・羅・支・馬・エスペラント・朝・蒙・葡の13言語の「独修」が列挙されている。

45）『朝日新聞』1905.4.14付朝刊（1）Dや柔道専門誌『大勢』1（1），講道館文化会，1922年（『大勢』1，本の友社，1986年）等にも広告があることもまた，実用書としての性格を示すといえよう。

ることからも浮かび上がる[46]。このことから，この「独脩」シリーズが一見実用書に当てはまらないように見える言語であっても実用書として編集・出版されたと見なし得るだろう。

(3)『英和通商字典』（参考）

同志社蔵（№000319793）の原物を調査した。148 × 108mm。発兌は梅原虎七ら7名，出版人は松井順時[47]，抄訳人に松岡馨（京橋区築地壹丁目五番地）の名がある。「明治十三年一月廿七日版権免許/同十一月　出版」とあるが，併せて確認したNDL蔵Dでは出版年月が「同十四年二月出版」と異なる上，「十四年二月」の部分が貼付けのように見える。そのため，NDL蔵Dは重版の可能性がある[48]。なお，NDL蔵Dでは題言の1頁目を欠く。

広告では「右ハ英国諸氏の商業字類より広く商語を摘纂して又懇切に我商家にも通用すべき和訳を加へ且附録には略語商用記号及各国の通貨等を掲け之を我貨幣にも比較し方今貿易の際特に無かる可らざる辞書にして苟も貿易に従事する諸彦ハ座右に欠く可からざる良書なり」と紹介している[49]。題言では「我国現今ノ商況ヲ察スルニ通商貿易ヲ諸州ニ為シ其業日ニ新タニ月ニ盛ンニ漸々商社等ヲ結ブ者鮮カラズト雖トモ遠ク英国ノ富昌ニ及バズ」とし，「法ヲ彼ノ長ニ採リテ我ノ短ヲ補」う書がないため「二三ノ洋書」を抄訳したという。本書も時代の機微を捉えた書籍という点で（1）・（2）と共通する。早川（2006: 297）・樋口（2007: 605）は，本書と（1）・（2）の松岡を同一人物と見做している。その可能性は高いと思われるため参考に示したが，本論文の筆者は断定の根拠を見出せていない。

4. 松岡馨と朝鮮語

松岡と朝鮮語について，「履歴書」には1885（明治18）年6月に「朝鮮人李樹庭（ママ）ニ就キ朝鮮語研究」とある[50]。李樹廷は1882（明治15）年9月に来日，東京外国語学校で朝鮮語を教えた（1883.8.9～1885.10.23）[51]。両者の接点は不詳だが[52]，松岡が朝鮮語を学んだのは李の辞職直前の

46）『エスペラント独脩』（加藤節、1906.9.30初版，同年11.12再版）の序には，「本書は、第廿世紀的理想の新用語として、全世界に通用せらる可き傾向を有する所のエスペラント語を、明治三十七八年役に因りて、世界の一等強国に列したる我が日本帝国々民に普及せしむる可き目的を以て著述せられたるものなり。／此のエスペラント語は将来に於て列国間の国際公文書並びに商業用語将た又た学術用語として全世界普ねく通用せらる可きものと有識者に認められつゝあるものなれば戦勝の桂冠を戴きつゝ世界に向つて雄飛すべき我が国民は諸列強国に卒先して之れが研究、之が使用の範を示す可き責任を有す。（後略）」とある。

47）小関（1980: 206, 209）によれば，『英米犯姦律』（1879年）の訳述，『琉球事件』（1880年）の編著を行い，「出版に手を染めている」人物である。後者の刊行年はNDL蔵書Dによった。なお，NDLにはこの他にも松井が関わったその他の図書も所蔵されている。

48）同志社蔵にある出版人・松井の印がNDL蔵Dにはない点も版次の違いを示唆する。

49）『東京日日新聞』1881.3.2（7）D（国文学研究資料館明治期出版広告データベース）

50）東公ID：000124529，東京都立教育研究所（1973: 852-853）

51）東京外国語大学史編纂委員会（1999: 969）

52）1885年9月には東京外国語学校・同校附属高等商業学校・東京商業学校が合併する。

時期に当たる。松岡の朝鮮語学習の方法・過程や習熟度は不明である[53]。さらに，朝鮮を訪れた形跡や朝鮮と関わった他の痕跡は見出せない。朝鮮語との接点がほとんど見られないことから，松岡は朝鮮語にわずかに接した一人の市井の人であり，朝鮮語については「一知半解の徒」[54]であったという姿が浮かび上がる。なお，『案内』の広告[55]に「教育上ノ経験ヲ以テ（中略）意ヲ致セリ」とあることから，速成朝鮮語学校設立以前にも朝鮮語を教えた可能性がある。

高等商業学校辞職後の松岡は，前述のように『案内』発行と共に私立速成朝鮮語学校を設立する。同校は，「年齢満十五年以上ニシテ尋常小学科卒業ノ学力アル者」を対象とし，「専ラ実用速成ノ目的ヲ以テ懇切ニ朝鮮語ヲ軍人商工子弟其他ノ有志者ニ教授スル所トス」るものである[56]。定員150名，束脩金30銭，授業料50銭/月，1年制で時間12時/週，前期（4.1～10.15）には諺文発音・綴字・誦読及訳解（単語）・仝（連語）・話稿，後期（10.16～3.31）には書取・対話・作文・飜訳が課程表に挙げられている。授業は午後6～7時と7時～8時に行い，前述の通り，「教科用書ハ追テ編纂致候迄教師口授講義シテ之ヲ生徒ニ筆記セシム但シ松岡馨著朝鮮語学独案内ヲ参考ニ用フ」とされ主に口伝で教えようとしたようである。場所は神田区佐柄木町21番地（茂木充実方所有家屋の2階，間口3間，奥行5間）で教場坪数15坪，教場は6部屋（6畳×2，4畳×2，3畳×1，板間×1）であった。教員は「品行方正ニシテ本校学科ヲ教授シ得ル学力アル者当分之内一名トス」とし，実質上，松岡のみと見られる。実態は夜間の語学教室のようなものである。

同校設置前年には，慶應義塾朝鮮語学校の設立願が出され，設置の年には朝鮮語を科目（のひとつ）に挙げた韓清語学校・東亜学院・私立東洋語学校・私立外国語学校等の設立願が東京で出されたり，福音会英語夜学校でも朝鮮語が教えられたが，多くが同様に夜間の学校であった[57]。速成朝鮮語学校も，日清戦争を背景とした朝鮮語特需の時流に乗って設置したものの，武士の商法の皮算用は当たらず，維持の見込が立たなくなり1年弱で廃校したと考えられる。

5. おわりに

本論文では，人物史主義・原物主義に立脚することにより，松岡馨と朝鮮語について，従来とは異なる以下の結論を示した。

松岡の学習書は，従来その刊行時期から「日清戦争という時代的背景の中で韓国語に対する

53）松岡の朝鮮語能力は，英語の素養があった筈にも拘わらず［m］と［n］の区別等の単純な音声認識を誤っている点等から推測するのみである（例：『案内』2版67頁の**심하** 臣下）。この素養は読解能力が中心であった可能性があることを査読者のお一方からご指摘いただいた。

54）これについては，査読者のお一方からのご教示による。

55）『読売新聞』1894.12.26朝刊（6）D

56）本段落以下とも東公ID：000124529，東京都立教育研究所（1973: 852–853）

57）東京都立教育研究所（1973: 830–831, 843–845, 847–849, 852–854, 871–873），広告（福音会英語夜学校）『朝日新聞』1895.2.27付朝刊（5）D，同年5.31付朝刊（6）D

需要に応じようと製作されたものと見て差し障りないようである。」と評価されたり，「日清戦争への活用のための朝鮮語会話書」・「軍人用の会話書」としてひとまとめにされたり，その明示的な一面が強調された[58]。しかし，『案内』が学校の（副）教材として編纂された節があること，商業出版物としての工夫を施し，幅広い対象を謳っていること，使い回しした『独脩』がコンセプトを修正しながら実用書として版を重ねたこと，両書ともに振られたにルビ，杜撰な編集状況等からは，2冊が時流に乗った売れ筋の実用書＝商業出版物という性格を備えていたことがわかる。言い換えれば，これらの学習書が従来の見かけ上の一面的な評価ではとらえきれない側面を持っていたことがわかる。

旧幕臣の御曹司・松岡の人物史に目を向ければ，幼少期から基本的に一貫するのは，時代の機微を捉えるに敏く，目先の時流に乗るが長続きしないという点である[59]。朝鮮を訪れた形跡や他に朝鮮と関わった痕跡も見出せないことから，朝鮮語との関わりも時流に乗った選択肢のひとつであったといえよう。ここからは，「朝鮮語に造詣が深」い，「朝鮮語の専門家」という従来の評価とは全く異なる人物像が浮かび上がる。

幕臣の長男に生まれた松岡は，明治維新を挟んで漢学・洋学を学んだ後，沼津兵学校資業生というエリートとなるが，宮仕えも続かず，10年近く続けた高等商業学校等の数学教師という官職をもあっさりと捨て，時流に乗って李樹廷から学んだ朝鮮語を元手に速成朝鮮語学校を設立するも失敗し，50代には「零落」した人物である。「哲学者風」だったという松岡の内なる思いはわからない。しかし，人物史に沿って見れば，才知に長けた[60]松岡にとっての朝鮮語は，英語や数学という技術や公務員・数学教師という職業のような「人生を切り拓く着脱可能なアイテム」[61]に過ぎなかったと捉えられる。

時流に乗って人生の一時期朝鮮語に関わった者は数知れない。たとえば，よりよい人生を求め，郷里の福井から朝鮮に渡り，朝鮮人児童に「国語」（日本語）を教える中で朝鮮語を身に着けて活用し，2冊の学習書を編纂し，朝鮮半島最低気温（−43.6℃）を記録した中江鎮で没したと見られる笹山章[62]が挙げられる。同様に，松岡も人生の中でわずかに接した朝鮮語をひとつのアイテムとして身に着け，一知半解の朝鮮語を元手に設立した学校の（副）教材として使うことも目論んだ商業出版物としての学習書を残したがゆえに誤った評価の下に名が残ってしまったのである[63]。松岡と朝鮮語との関わりは，朝鮮語に接した市井の人のひとつの例を示している。

58）李康民（2015: 85）・成**玧姸**（2014: 39）

59）何事も長続きしないという視点については，科研研究会で矢野謙一名誉教授のご教示をいただいた。

60）ことに前半の適否は措くとして，石橋（1916a: 23）では「折花攀柳の癖あり然れとも才学あり」ともある。

61）この概念については，植田（2017: 23）参照。

62）植田（2018・2024）参照。

63）このような学習書を朝鮮語資料や日本語資料として利用する際には，注53で示したような一知半解の徒による記述である点は両刃の剣となりうることに十分注意する必要がある。

上述のような誤った評価がなされる要因の検討は今後の課題である[64]。また，六角恒廣は中国語教育史を論ずる中で，日本における外国語学習には，「文化語学」と「実用語学」があると指摘している[65]。この点も踏まえ、他の言語の事例とも関連させて考察することも今後の課題のひとつといえよう[66]。

引用文献[67]

浅香武和（2013）『西班牙語事始』同学社

石橋絢彦（1916a）「沼津兵学校沿革（五）」『同方会誌』42，同方会（大久保利謙（1978）『同方会誌　復刻』7，立体社）

石橋絢彦（1916b）「沼津兵学校沿革（六）」『同方会誌』43，同方会（大久保利謙（1978）『同方会誌　復刻』7，立体社）

植田晃次（2007）『研究成果報告書　日本近現代朝鮮語教育史』植田晃次

植田晃次（2011）「赤峰瀬一郎の経歴と著作」第62回朝鮮学会大会口頭発表配布ハンドアウト（論文）［要旨は『朝鮮学報』222に掲載］

植田晃次（2012）「明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究」李東哲　他『日本語言文化研究』2（下），延辺大学出版社

植田晃次（2014）「金島苔水とその著書」李東哲　他『日本語言文化研究』3（上），延辺大学出版社

植田晃次（2017）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た山本正誠と朝鮮語」『言語文化研究』43，大阪大学言語文化研究科

植田晃次（2018）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た笹山章と朝鮮語」李東哲　他『日本語言文化研究』5（下），延辺大学出版社

植田晃次（2019）「元参謀本部朝鮮国語学生徒・新庄順貞と朝鮮語」第70回朝鮮学会大会口頭発表配布ハンドアウト（論文）［要旨は『朝鮮学報』254に掲載］

植田晃次（2021）「銀行員・弓場重栄と朝鮮語」『言語文化研究』47，大阪大学言語文化研究科

64）このような評価がなされる要因には，投機的な目的から言語教育に関わる人物や組織があるという事実を研究者が意識的・無意識的に捨象し，知的好奇心や友好的／敵対的といった政治的な意図に動機づけられた行為として言語教育・学習を描きたいという「欲望」があるのではないかというご指摘を査読者のお一方から賜った。注5で挙げた評価は朝鮮研究からのものではないが，朝鮮研究（あるいは日本研究）のなかでもこのような評価は少なくない（植田2021: 18-19・2023: 13）。

65）「その1つは文化を学習するための手段として、その国のことばを学習する。他の1つは、社会的な諸活動、たとえば、政治・経済などの社会的活動に役立つための学習がある。そこで前者を文化語学、後者を実用語学というように分けることができる。もちろん、文化語学、実用語学の両者には、別に価値観はふくまれない。」と指摘している（六角1989: 85）。この点は，査読者のお一方からご教示いただいた。

66）「一知半解の徒」が朝鮮語教育に関わる現象は現代にも共通することである。

67）便宜上，朝鮮名の配列は日本漢字音によった。朝鮮語文献は拙訳で示し，「＊」を付す。本文中を含め，デジタル化資料にはDを付した。ただし，リポジトリ等で公開された論文等はその旨を示していない。

植田晃次（2023）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た島井浩と朝鮮語」『言語文化研究』49，大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻・外国学専攻・日本学専攻応用日本語コース

植田晃次（2024）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た笹山章と朝鮮語（2）」『批判的社会言語学の様相（言語文化共同研究プロジェクト2023）』大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

落合博志（2003）「高乗勲氏蒐集の古典籍」国文学研究資料館『田安徳川家蔵書と高乗勲文庫』臨川書店

木山実（2009）『近代日本と三井物産』ミネルヴァ書房

小関恒雄（1980）「明治初期英米法医学のわが国への紹介」『医学図書館』27（4），日本医学図書館協会

斎藤明美（2014）「明治27年刊『朝鮮語学独案内』の研究」『日本語文学』63，韓国日本語文学会

桜井義之（1979）『朝鮮研究文献誌　明治大正期』龍溪書舎

SUN Yuna（成玧姮）（2009）「近代日本語資料としての朝鮮語会話書」（東京大学博士学位論文）

成玧姮（2014）『近代朝鮮語会話書に関する研究』J＆C

田口親（2000）『田口卯吉』吉川弘文館

田阪正則（2010a）「公文書による韓語学所出身者たちのその後」『日語日文学研究』73（2），韓国日語日文学会

田阪正則（2010b）「旧外語朝鮮語学科海軍省生徒の留学をめぐり」『日語日文学研究』75（1），韓国日語日文学会

田村貞雄（1998）「慶喜と旧幕臣の静岡移住」田村貞雄『徳川慶喜と幕臣たち』静岡新聞社

陳南澤（2013）「『朝鮮語学独案内』における仮名音註について」『大学教育研究紀要』9，岡山大学国際センター，岡山大学教育開発センター，岡山大学言語教育センター，岡山大学キャリア開発センター

陳南澤（2014）「1894年刊『日韓會話』の韓国語について」『大学教育研究紀要』10，岡山大学グローバル・パートナーズ，岡山大学教育開発センター，岡山大学言語教育センター，岡山大学キャリア開発センター

陳南澤（2015）「1895年刊『日本語独案内』について」『大学教育研究紀要』11，岡山大学グローバル・パートナーズ，岡山大学教育開発センター，岡山大学言語教育センター，岡山大学キャリア開発センター

東京外国語大学史編纂委員会（1999）『東京外国語大学史』東京外国語大学

東京都立教育研究所（1973）『東京教育史資料大系』7，東京都立教育研究所

西澤朱実（2001）「松岡四郎次郎」新人物往来社『新選組大人名事典（下）』新人物往来社

早川勇（2006）『日本の英語辞書と編纂者』春風社

樋口雄彦（1990）「ぬまづへいがっこう　沼津兵学校」国史大辞典編集委員会『国史大辞典』11，吉川弘文館
樋口雄彦（1997）「史料紹介　沼津兵学校人名簿」『沼津市博物館紀要』21，沼津市歴史民俗資料館・沼津明治史料館
樋口雄彦（2006）「沼津兵学校関係人物履歴集成 その三」『沼津市博物館紀要』30，沼津市歴史民俗資料館・沼津明治史料館
樋口雄彦（2007）『沼津兵学校の研究』吉川弘文館
樋口雄彦（2012）「学制期諸県に及んだ静岡藩小学校の影響」『国立歴史民俗博物館研究報告』167，国立歴史民俗博物館
一橋大学学園史刊行委員会（1991）『一橋大学学生史資料』12（補遺別冊），一橋大学学園史刊行委員会
無署名（1998）「姻戚関係にみる沼津兵学校の人物　その二」『沼津市明治史料館通信』55，沼津市明治史料館
米山梅吉（1935）『幕末西洋文化と沼津兵学校』三省堂D
李康民（2010）「1894年刊『朝鮮語学独案内』について」『日本学報』82，韓国日本学会＊
李康民（2015）『近代日本の韓国語学習書』亦楽＊
李康民（2018）「松岡馨 著『朝鮮語独修』について」『比較日本学』44，漢陽大学校日本学国際比較研究所＊
李康民（2019a）「『朝鮮語学独案内』解題」『近世および近代日本の韓国語学習資料叢書』12，亦楽＊
李康民（2019b）「『朝鮮語独修』解題」『近世および近代日本の韓国語学習資料叢書』14，亦楽＊
六角恒廣（1989）『中国語教育史論考』不二出版

松岡馨年譜[68)]

年月日	年齢	出来事（ゴシックは社会の出来事）
1853（嘉永6）.4.28	0	のちに榎本武揚政権下の江差奉行を務める幕臣・松岡四郎次郎（譲）と母・ふさの長男として誕生（旧名捨三郎，静岡県士族）
1861（文久元）.4.	8	長谷部甚弥に漢学を学ぶ（～1863.11.）
1862（文久2）.2.	8	古屋佐久左衛門塾で英学を学ぶ（～1863.5.）
1863（文久3）.5.	10	福地源一郎に英学を学ぶ（～1863.9.）
1867（慶応3）.10.14	14	**大政奉還**
1868（慶応4）.2.	14	大鳥圭介に仏語学を学ぶ（～1868.6.）

68）社会の出来事については，日本史広辞典編集委員会（2001）『山川　日本史小辞典（新版）』山川出版社（2007年第1版第4刷），歴史学研究会（2001）『日本史年表　第四版』岩波書店（2008年第8刷）も参照した。なお，月日が不明な事柄については誕生日後の年齢を示した。

1868（慶応4）.5.	15	徳川家の駿府への移封が決定され，旧幕臣の静岡への移住
1868（慶応4）.7.25	15	榎本軍に加わり脱走する父に代わり家督を継ぐ
1868（明治元）.9.8	15	明治と改元
1869（明治2）.1.	15	沼津兵学校開校
1869（明治2）.3.18	15	沼津小学校教授方介となる
1869（明治2）.5.18	16	箱館戦争で榎本武揚軍が降伏，戊辰戦争終結
1870（明治3）.9.28	17	沼津兵学校の第6期資業生となる（9.24とも）
1871（明治4）.5.3	18	兵学校附属病院生徒となる
1871（明治4）.9.16	18	「医学為修業東京在勤」となる
1872（明治5）.4.18	18	病院生徒を差免される
1872（明治5）	19	沼津兵学校，陸軍兵学寮に合併
1873（明治6）.2.	19	ダビッド＝ヘーヤに英語を学ぶ（～1874.5.）
1874（明治7）.1.	20	上野清に数学を学ぶ（～1875.6.）
1876（明治9）.3.4	22	熊谷県暢発学校十二等教員となる
1876（明治9）.7.5	23	同校教員一同，職務差免される
1877（明治10）.4.22	23	陸軍省に勤める（～1878.3.11）
1878（明治11）.3.12	24	工部省に勤める（～1881.3.4）
1880（明治13）.11.	27	『英和通商字典』出版（1881.12に重版か）
1881（明治14）.3.15	27	商法講習所教師として採用
1881（明治14）.9.14	28	商法講習所廃校（8.31），東京府商法講習所設置に伴い，同講習所一等助教諭となる
1884（明治17）.3.	30	同講習所，東京商業学校（農商務省所轄）となり，同校教員心得（3.27），助教（8.28）となる
1885（明治18）.6.	32	東京商業学校，文部省所轄となる
1885（明治18）.6.	32	李樹廷から朝鮮語を学ぶ
1885（明治18）.6.4	32	同校助教諭（6.4）となる（数学を担当）
1887（明治20）.10.5	34	同校，高等商業学校に改称（10.5）（商業算術を担当）
1888（明治21）.	35	この年は附属商工徒弟講習所所属（？）
1890（明治23）.10.15	37	高等商業学校助教授となる
1892（明治25）.8.2	39	「依願免本官並兼官」となる
1892（明治25）.9.19	39	速成女学校を設置，校長・教務を兼務
1893（明治26）.3.4	39	速成女学校廃校
1894（明治26）.8.	41	日清戦争開戦
1894（明治27）.12.20	41	『朝鮮語学独案内 全』初版発行
1895（明治27）.3.12	41	『朝鮮語学独案内 全』2版発行
1895（明治28）.4.4	41	私立速成朝鮮語学校設置を願い出て，設置許可を受け（5.1），朝鮮語を教える（『朝鮮語学独案内 全』を「参考」とする）
1895（明治28）5.7	42	『朝鮮語学独案内 全』3版発行
1896（明治29）.3.9	42	「維持之見込相立不申候ニ付」という理由で廃校届を提出
1896（明治29）.10.14	43	『朝鮮語学独案内 全』4版発行

1900（明治33）.2.16	46	『朝鮮語学独案内 全』5版発行
1901（明治34）.11.22	48	『朝鮮語独脩 全』初版発行
明治30年代中期		零落していたが，「何処となく凡人とは違ふ様にて哲学者風」だったという
1903（明治36）.12.31	50	『朝鮮語独脩 全』3版発行
1904（明治37）.2	50	日露戦争開戦
1904（明治37）.2.15	50	『朝鮮語独脩 全』4版発行
1904（明治37）.3.25	50	『朝鮮語独脩 全』5版発行
1904（明治37）.8	51	第１次日韓協約
1904（明治37）.11.25	51	『朝鮮語独脩 全』6版発行
1905（明治38）.6.20	52	『朝鮮語独脩 全』7版発行
1905（明治38）.11	52	第２次日韓協約
1906（明治39）.1.5	52	『朝鮮語独脩 全』8版発行
1907（明治40）.4.3	53	『朝鮮語独脩 全』9版発行
1907（明治40）.7	54	第３次日韓協約
1909（明治42）.5.20	56	『朝鮮語独脩 全』10版発行
1910（明治43）.8.	57	韓国併合
1910（明治43）.10.10	57	『朝鮮語独脩 全』11版発行
1914（大正3）.	60/61	死去（1917年説もあり）

（付記）

本論文はJSPS科研費23K00745による成果の一部である。なお，それ以前の科研費（17320085・20320081・23520671・26370726・18K00782）で得た知見も含んでいる。

資料閲覧では関係諸機関のご配慮をいただいた。また，一連の科研費による研究の共同研究者・矢野謙一名誉教授（熊本学園大学）から多くの助言を，査読者お二方から有益なコメントを賜った。本論文ではこれらのご教示を反映させた部分がある。

現在では不適切とされる語句も歴史的経緯から当時の表現を用いた場合がある。

なお，本論文は，大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻の研究倫理審査で承認された研究の一部である（研企B-3「「旧朝鮮語学」と20世紀後半の朝鮮語教育から見た日本近現代朝鮮語教育史の研究」，2024年10月9日承認）。